



高原の風だより

2015(平成27)年6月 発行 <第1号>

地域づくりは「よそ者」「若者」「ばか者」

木曾交流創造塾(砂山右近代表世話人)では木曾地域の活性化を考えようと3月12日、木曾福島会館で講演会を開催しました。講師は名古屋で経営コンサルタント会社を営む毛利京申先生(写真)で、当日は会員のほか一般の住民など50人余りが出席し話を聴きました。

毛利先生は人口減少問題にも触れ「職がないと人口が減っていく。そのためには企業誘致が必要になってくるが、企業誘致は全国各地で行われており非常に難しい。そこで既存企業の構築が重要になる。利益が2倍になれば雇用も増える。そのほかUターン者やIターン者を呼び込むことも大切だ」と力説しました。

また、地域振興策では地元の漬物を使ったT1グランプリの開催や特産のそばやそばつゆを使用したB級グルメ(B1グランプリ)など食を活かしたイベントを提案しました。

最後に、今後のまちづくりの方向性としては ①地域資源の活用 ②地域の連携 ③ばか者、よそ者、若者の活用をあげられました。まちづくりには、既存の枠にとらわれない斬新なアイデアや行動力が大切だ、ということだと思います。私はこれにもうひとつ「女性」を加えたいと思います。女性には、男性では思いつかないような細やかな視点や発想を期待できると思います。



「年輪経営」 伊那食品工業(株) 塚越 寛 会長

北海道オホーツクのまちづくりの仲間が2月下旬、高校生を引率して来県し、伊那食品工業株式会社を見学して塚越会長(写真)の話を聴くということで私たちにも声がかかり参加。北海道をはじめ東京などからの参加者も含め30人ほどが熱心に塚越会長の話に耳を傾けました。

「かてんパパ」でお馴染みの伊那食品工業株式会社は、寒天製造では世界第一位のシェアを誇り社員480名、年間売上げ176億円(2013年度)。この20年間で、会社が嫌で退職した人間はゼロ。社員貸付制度や月に一人500円のお菓子手当、隔年での海外旅行など福利厚生も充実している。

かてんパパブランドは200種類余りで、新技術や新商品の研究開発部門に全社員の1割を配置。韓国やモロッコ、チリなど海外4カ国に協力工場を持っていますが、安い労働力を目当てにした海外進出はしていないといえます。

また、かてんパパガーデンは年間35万人が訪れる観光スポットにもなっていますが、会社経営の要諦は「ファンづくり」だと力説。やはりここでも多くのリピーターの存在が大きいようです。これからの木曾の観光でも同様のことが言えるかと思えます。道の駅や温泉、旅館やホテル、そのほかの観光施設等でも「いかにリピーターを確保するか」このことが非常に重要なことだと思います。

「急成長は敵」と言う塚越会長。少しずつ確実に会社を成長させる「年輪経営」を会社経営の理念として毎年着実に売上を伸ばしています。これらの考え方や取り組みは会社経営だけではなく、まちづくりなどにおいても大いに参考になる点があると感じました。

講演会の後は施設見学があり、夜はレストラン「さつき亭」で井上社長さんにも出席いただき食事会が行われました。社長さんはとても気さくな方で、大変有意義な時間を過ごすことができました。

なお、塚越会長の経営理念をまとめた文庫本『年輪経営』(写真)が光文社から出版されていますので、興味のある方はぜひ一読してみてください。



景観を生かしたまちづくり

はじめに

開田高原では1972（昭和47）年に条例を制定し、大学の研究機関や民間のシンクタンク等の専門家のお力添えをいただきながら、住民と行政が一緒になって美しい景観づくりを進めてきました。

これらの先進的な取り組みが高い評価を受け、次のように数々の賞もいただきました。

- 過疎地域活性化連盟会長賞（平成6年度・国土庁、全国過疎地域活性化連盟など主催）
- 第3回美しい日本のむら景観コンテスト むらづくり対策推進本部長賞（平成7年度・農林水産省主催）
- 農村アメニティコンクール 特別優秀賞（平成8年度・国土庁主催）
- 毎日・地方自治大賞 奨励賞（平成8年度・毎日新聞社主催）

かつては全国から視察も相次ぎました。併せて講演依頼も多くあり私も県内はもとより東京や埼玉、愛知や滋賀、徳島などへも出掛け話をさせていただきました。（ちなみに4年前の大震災の翌日は宮城県蔵王町へ講演に行く予定になっていました。今度、時間が取れたらボランティアで行って来たいと考えています）

町村合併後の平成18年には木曾町の開田高原地域が「日本で最も美しい村」連合に加盟を認められました。そして、5年後には木曾町全体が加盟することになりました。

「はぜ」をモチーフにしたサインシステム（公共案内看板）

美しい自然景観を台無しにする一番大きな要因は、なんといっても乱立する広告看板です。開田高原では条例により「開田高原全域で商業看板などの屋外広告物を表示または設置してはならない」と規定しています。

ただ、観光客などに対して「案内看板がなかったために目的の場所が分からない」といったようなサービスの低下につながってはなりません。そこで開田高原では農村景観を代表する一つである「はぜ」をモチーフとしてサインシステム（公共案内看板）の整備を行って来ました。（写真は広域サイン）

これらサインは設置場所や施設規模の大小、公共性の強弱などに応じて広域、中域、狭域と3つの種類に分けられています。（このサインシステム整備事業は、その後広域連合で行うようになり、町村毎に特色を生かしたデザインが用いられています）



公共施設は伝統的な「切り妻」

看板とともに景観に大きな影響を及ぼすのが建物のデザインやその色彩です。開田高原では公共施設を整備する場合、伝統的建築様式「切り妻」のデザインを用いてきました。開田中学校（写真左）や役場（支所）、そば工場、温泉、公衆トイレなどみんなこの様式で統一性を図っています。また、屋根の色については専門家の意見を踏まえ茶系色に統一しています。

個人の庭も貴重な観光資源

私は昨年から木曾福島郵便局で働いていて、主に黒川筋を中心に郵便や荷物を配達しています。そういう中で以前、車を運転しているときには気づきませんでしたが、歩いて郵便を配っていると手入れされた素晴らしい庭が沢山あることに気づきました。刈り込みされたイチイやマツをはじめ桃色のシャクナゲやサツキ等など。これらは個人の所有ですが、一般の人にも目に触れることから公共的な要素も大きく貴重な観光資源であると思います。



手入れされた庭

悪いものをなくす

美しい景観づくりを進めるための事業には、どうしても多額のお金を必要とします。当然、計画的に行っていかなければなりません。それではお金がないから景観づくりはできないかと言うと決してそうではありません。今、景観を阻害しているものが沢山あるかと思っています。一番は何と言っても広告看板かと思

います。中には壊れたり、看板の文字が消えて用をなさなかったりしている看板をはじめ、廃自動車など景観を損ねているものが数多く見受けられます。これらの悪いものを取り除くことによって、結果として美しい景観をつくることは容易にできることです。これはぜひ早めに行なって欲しいことのひとつです。

木曾福島駅前広場も以前はゴミ箱のゴミがあふれ見苦しいときもありました（写真右）。しかし、今年全面的に整備が行われ、最初置いていたゴミ箱も今は撤去しとてもきれいになりました。（余談ですが、毎日このポストの集荷を行っています）



今秋には木曾町や南木曾町を主会場にしてNPO法人「日本で最も美しい村連合」の大会が行われることになっているようです。ぜひ豊かな自然と美しい景観の中で、おもてなしの心を持って全国からの皆さんをお迎えしたいものです。

なお、東北の震災から4年を経過しましたが、まちづくりで日ごろお世話になっている宮城県の前丸森町長の渡辺さんから近況をお寄せいただきましたので次に紹介します。

豊かに暮らすための町並み景観

宮城県 前丸森町長 渡辺 政巳

予想を超える津波により多くの皆さんが亡くなられた東日本大震災から丸4年が経過した。震災を風化させることなく、再び同じように地震・津波等に犠牲者を出さないように心掛けや取組、対応が重要だ。加えて思うことは、復興のあり方が気がかりだ、魅力を創出した住みたくなるまちづくりになっているかどうかである。

3月7日にはロータリークラブ阿武隈ゾーン主催の復興式典が仙台空港で行われた。献花、ロータリーの鐘演奏、さらには巨理中学校吹奏楽部の演奏、そして岩手県久慈高校マンドリン部の演奏等が行われ追悼した。あらためて犠牲になられた方々に哀悼の意を表したいと思う。

さて、ようやく仮設住宅から復興住宅に、人々が移り住むようになってきた。ただ残念なのは、未来に誇れ、残せるまちづくりになっていないように思う。日常生活を豊かに暮らすためにもっと町並み景観を考慮すべきではないか。最低でも、電線の地中化はしてほしい。

例えば、ヨーロッパの国々では街並みが統一されているところがある。屋根の色とか壁の色とか規制をし、美しい景観を創出している。復興住宅地は山を削って一面平にすることなく、あえて傾斜を利用し段々に住宅をつくるなど工夫がほしい。

あるホテルでは全室部屋から海が見える、同じように各家庭から海が眺められるようにするなど考え、実践してほしいものである。素敵な場所で毎日気分よく暮らせる、そんな街であってほしい。



コ－ヒ－タイム

私は地域づくりの関係で全国各地に多くの知り合いがいますが過日、全国過疎地域自立促進連盟が発行している情報誌『でぽら』（地方と都市を結ぶホットライン・マガジン）を編集している知人から手紙と本が届きました。

その本は『シルバー川柳』（ポプラ社）で、社団法人全国有料老人ホーム協会が主催した「シルバー川柳」の入選作をまとめたものです。

私もこの本を読んで久しぶりに大笑いをしてしまいました。「笑いは健康のもと」。私の気に入ったものを少し紹介しますので、皆さんも大いに笑ってください！

- 「アーンして」 むかしラブ いま介護
- けーたいの 返事をしようと 葉書出し
- 異性の目 シルバーパスを 出しそびれ
- 危ないと 孫に注意し 転ぶ祖母
- 墓参り 「下見ですか？」と 尋ねられ
- ◎ オレオレの 詐欺もお手上げ 遠い耳
- 目ん玉も はずしてみせると せがまれる
- 粗大ゴミ そう言う妻は 不燃物
- 補聴器を はめた途端に 嫁、無口
- 素っぴんに 隣の犬が 後ずさり
- ◎ 紙とペン 探してる間に 匂を忘れ
- 改札を 通れずよく見りゃ 診察券
- 起きたけど 寝るまでとくに 用もなし
- ◎ 目覚ましの ベルはまだかと 起きて待つ
- デジカメは どんな亀かと 祖母が訊く
- お若いと 言われ帽子を 脱ぎそびれ
- ◎ゴシックは、特に私のお気に入り。

はりきりご長寿列伝

五月日晴雄さん（82歳・木祖村小木曾）①

私はNHKのふるさと通信員をやっていますが、2月13日にはテレビのイブニング信州「はりきりご長寿列伝」で、木祖村の五月日晴雄さん（82歳）を紹介させていただきました。

仏像の微笑に癒される思い

営林署職員だった五月日晴雄さんの趣味は仏像彫刻。始めたのは今からもう45年以上も前のことになります。北海道旅行の際、民芸品の熊の木彫りの実演販売を見たのがきっかけです。最初は見よう見まねで招き猫などの小物を作っていました。その後もっと本格的に仏像彫刻を学ぼうと3年間の通信教育を受けました。そこで彫り方の基礎をはじめ方眼紙に下書きをして細部まで寸法を出す方法などを取得。



工房で千手観音像を手にする五月日さん

「難しいのは顔の表情です」という五月日さんが、樺や檜などを使って今までに彫り上げた仏像の数は、なんと200体以上にも上ります。その技術の高さと数の多さに驚かされてしまいますが、工房の一室に所狭しと並べられている光景はまさに圧巻！



上げて2メートルを超える大作の布袋様は、寄贈先の木祖村役場玄関に展示されています。



木祖村役場

今までで一番難しかったのは千手観音像だったそうですが、一番気に入っているのはふくよかな笑顔の布袋様。五月日さんが半年余りを費やして仕手の込んだ細工が施された仏像。上げた2メートルを超える大作の布袋様は、寄贈先の木祖村役場玄関に展示されています。

にある布袋様



私の本棚

『スマート・テロワール』

農村消滅論からの大転換
(松尾雅彦著・学芸出版社)

著者であるカルビー食品工業(株)の松尾会長とは、私が役場職員のころ「日本で美しい村連合」の仕事の関係で大変お世話になりました。その松尾さんがこれからの日本の農業について考える本を出版され送って下さいました。



人口減少による町村消滅論が盛んな昨今ですが、松尾さんは「消滅どころか農業・農村にこそ成長余地がある」とし、水田の畑地への大転換による穀物産業の創造を提唱されています。

皆さんの声をお聞かせ下さい。

「高原の風だより」は、まちづくりや村おこしを一緒に考えよう、という会報です。木曾町内に新聞折り込みを通じてお届けしていますが、町内で新聞を購読していない方や町外の方には郵送等でお届けしますので、希望される方は電話やFAXなどでお気軽にお知らせ下さい。

地域づくりや生活の困りごとなど、どんなことでもけっこうですので皆さんの声をお聞かせ下さい。



編集・発行者： 大目 富美雄（おおめ ふみお）

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661 携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com